

香川大学における留学生対象の日本語教育

村岡 貴子・山下 明昭・中井幸比古

1. はじめに

近年、香川大学においては、学部または大学院への進学を希望する留学生が増加している（注1）。同時に、留学生の専門分野やニーズの多様化も著しい。そこで、筆者らは、そういった「多様化」に対応した日本語・日本事情科目の充実をはかりたいと考えている。本稿では、まず、香川大学における日本語教育の現状を示し、1993年度後期の（注2）日本語・日本事情科目（以下日本語科目と略す）の実践報告を行う。次に、香川大学における日本語教育の課題を考察する。

2. 香川大学における日本語教育の現状

2.1. 日本語科目の受講生

香川大学の留学生は、1993年2月1日の時点で、大学院生、学部生、研究生、特別聴講学生（注3）、科目等履修生の5つのタイプに分かれて在籍している。（表1（香川大学本部の資料による）参照）

表1 香川大学における留学生在籍者数

平成6年2月1日現在

本 学 在 籍 者					連合大学院在籍者	
国 費 留 学 生		私 費 留 学 生			国 費	私 費
修 士	研 究 生	修 士	学 部	研 究 生	博 士	博 士
農学 研究科 1年 7人 農学 研究科 2年 8人	教育学研究科 2人 農 学 部 4人	教育学研究科 1年 2人 2年 1人 経済学研究科 1年 1人 2年 1人 農学 研究科 1年 2人	教 育 学 部 2年 1人 3年 1人	教 育 学 部 7人 經 済 学 部 10人 教 育 学 研 究 科 1人 經 済 学 研 究 科 1人	1年 7人 2年 5人 3年 4人	3年 1人
15人	6人	7人	2人			
計	21人	計		28人	16人	1人
合 計				49人	合計	17人

◇「連合大学院」は、愛媛大学、高知大学、香川大学の3大学による農学部の大学院である。特別聴講学生は研究生に含まれている。科目等履修生の数はこの表には含まれていない。

例年、日本語科目を受講する留学生は大半が研究生である。1993年度後期においても、日本語科目の受講生総数18名中10名が研究生であった。学部生は日本語科目を受講していなかった。1993年度には、学部生は教育学部に2名（学年は別）在籍しているが、その2名は既に1991年度と1992年度に日本語科目の単位を取得済みで、1993年度には受講していなかった。また、大学院生は、教育学部と経済学部の3名が受講していた。特別聴講学生は3名、科目等履修生は2名であった。毎年、原則として開講前に、日本語科目の受講希望者は、面接等のプレイスメントテストの結果により、初級、中級、上級のクラスに配置される。

次に、日本語科目の受講生について、大学院生、学部生、研究生、特別聴講学生、科目等履修生ごとに、問題を考察する。なお、学部生は1993年後期には受講していなかったが、今後増加することが考えられるので、予測される問題点について考察する。

2.1.1. 大学院生

日本語科目の授業に出席している大学院生は少ない。これには、次の2つの理由がある。まず、大学院生の日本語能力が非常に高く、日常生活や研究生活にほとんど支障がないため、指導教官も留学生も日本語を受講しなくてもよいと判断していることである。次に、大学院生は、研究生等と異なり、自分の専門の授業や論文執筆にかなり時間を費やさなければならないため、日本語科目の受講が無理な場合が多いということである。受講の登録をしていても、ゼミでの発表の準備や実験等の都合で、授業を休むことがある。

現在、留学生の大学院への入学は、各学部の教官が決定するので、大学院生の日本語能力が、受け入れ教官の意識によって異なることが多い。場合によっては、大学院生の方が、大学院を受験する研究生よりも日本語能力が低

いこともある。今後、以上のような問題を踏まえて、大学院進学希望の留学生に要求する日本語能力について全学的に熟考する必要があるようである。このことに起因する問題については、3.1.1. で詳細に示す。

2.1.2. 学部生

一般に国立大学の学部留学生には、日本人学生と同様に、講義を聞いたり、レポートを書いたりできる高い日本語能力が要求されるので、「日本語能力試験」(注4)の1級に合格していることが学部受験の条件とされている。

学部留学生は、卒業要件に必要な外国語科目の1つとして、日本語科目を履修することができる。現状では、学部生が日本語科目を履修した場合、日本語能力が低い研究生と同一クラスで学習することになり、学習意欲が損なわれる可能性がある。今後、学部生の数が増加すれば、学部生対象の日本語科目を開講しなければならないだろう。

2.1.3. 研究生

研究生は、日本語科目の受講生の大半を占める。全体的に研究生は日本語学習に対する動機が高く、熱心に学習する。しかし、研究生は日本語教官がプレースメントテストで指定したクラス以外にも、自分の日本語能力とは一致していないレベルのクラスを受講することが非常に多い。例えば、中級レベルの研究生が初級クラスを受講し、中級レベルの質問をさかんにした場合、初級レベルの受講生の学習意欲が損なわれたり、また、初級レベルの研究生が中級クラスを受講し、初級レベルの質問をした場合、授業の速度が大幅に低下する等、クラス運営が困難になることがある。

研究生は、通常研究生になって6か月後か1年後に学部、または大学院を受験する。そのため、受験までに日本語能力を向上させることが、絶対の目標となる。そこで、研究生は、クラス間のレベル差に関係なく、できるだけ日本語の授業に出席するのである(注5)。しかし、現在では、授業の選択の幅が狭いため、できるだけ多くの日本語の授業に出たいという留学生に「この授業には出てはいけない」とは言えない状況である。ただし、この間

題には、むやみに同一レベルの授業の数を増やすだけでは解決が困難な面がある。研究生はそれぞれ専門のクラスやゼミにも出席しているため、仮に日本語の授業が増えたとしても、日本語と専門の授業時間とが重なってどちらかを選択せざるを得ない可能性が高くなる。そこで、考えられる最も現実的な解決策は、研究生志望の留学生に一定以上の日本語能力（例えば、最低、日本語能力試験の3級合格以上のレベル）を要求することである。そうすれば、日本語科目の受講生のレベル差を縮小することが可能となる。筆者らは、今後、研究生志望の留学生の日本語能力に関して、全学的なコンセンサスが必要になると考えている。

2.1.4. 特別聴講学生

特別聴講学生の場合、日本語受講に関しては特に大きな問題は認められない。1993年度の場合、大学院あるいは学部の受験を控えている特別聴講学生はいなかった。彼らは、自分の専門分野を明確に意識しており、また、日本の大学で日本語を習得したいという強い動機もある。1993年度に日本語を受講している特別聴講学生は全員、香川大学での受講延長願を提出して承認され、現在も続けて日本語科目を受講している。

2.1.5. 科目等履修生

日本語の科目等履修生は、毎年数名在籍している。1993年度後期の場合、科目等履修生は2名であった。その2名は、生活のための日本語を学習したいという希望があった。彼らの場合、事前に日本語の教官が面接等をしてプレイスメントを決定するので、研究生において認められたような、日本語能力と受講クラスのレベルとの不一致による問題はほとんどなかった。

2.2. 日本語科目の担当教官

日本語・日本事情の担当教官は以下のようである。（肩書きは1994年10月現在）。

①日本語ⅠⅡ（初級） 非常勤講師 富永 京子

- ②日本語ⅢⅣ（中級） 講 師 村岡 貴子
 ③日本語ⅤⅥ（上級） 助 教 授 中井幸比古
 ④日本事情ⅠⅡ 講 師 山下 明昭

②③④はいずれも教育学部言語学・日本語教育教室の所属である。香川大学の、留学生対象の日本語科目の授業はこの教室によって運営されている。

また、言語学・日本語教育教室所属の教官は、留学生対象の日本語科目を担当するのみならず、総合科学課程言語文化コースにおいて、言語学・日本語学・日本語教育学関係の専門科目を担当し、日本語教員養成を行っている。卒業生には、日本語学校等において日本語教師として活躍しているものも多い。

2.3. 日本語・日本事情科目のカリキュラム

下記の表2は1993年度の、表3は1994年度のカリキュラムである（『香川大学一般教育修学案内』（1993・1994）より）。「日本語」のⅠⅡは、初級レベル、ⅢⅣは中級レベル、ⅤⅥは上級レベルの授業である。授業は、ティーム・ティーチング制をとらず、各レベルごとに1名の教官が責任を持って授業を担当した。

表2 日本語科目（外国人留学生対象）

日本語

授 業 名	単位数	期間	毎週 時数	担当教官	備 考
日 本 語 Ⅰ	2	前	4	富 永	水1, 2 (留学生対象)
〃 Ⅱ	2	後	4	〃	水1, 2 (留学生対象)
〃 Ⅲ	2	前	4	村 岡	火2, 3 (留学生対象)
〃 Ⅳ	2	後	4	〃	火2, 3 (留学生対象)
〃 Ⅴ	2	前	4	中 井	火4, 木2 (留学生対象)
〃 Ⅵ	2	後	4	〃	火4, 木2 (留学生対象)

日本事情

授 業 名	単位数	期間	毎週 時数	担当教官	備 考
日 本 事 情 Ⅰ	4	前	4	山 下(明)	木3, 4 (留学生対象)
〃 Ⅱ	4	後	4	〃	木3, 4 (留学生対象)

表3 日本語科目（外国人留学生対象）

日本語

授業名	単位数	期間	毎週時数	担当教官	備考
日本語 I	2	前	4	中井	火3, 4 (留学生対象)
” II	2	後	4	(未定)	火3, 4 (留学生対象)
” III	2	前	4	村岡	火2, 3 (留学生対象)
” IV	2	後	4	”	火2, 3 (留学生対象)
” V	2	前	4	富永	水1, 2 (留学生対象)
” VI	2	後	4	”	水1, 2 (留学生対象)

日本事情

授業名	単位数	期間	毎週時数	担当教官	備考
日本事情 I	4	前	4	山下(明)	木4, 5 (留学生対象)
” II	4	後	4	”	木4, 5 (留学生対象)

外国人留学生の対象の日本語科目は、香川大学学則第68条第2項に規定されている。また、『香川大学報』101号（1994）には、留学生に係わる卒業要件として修得すべき単位について、下記第1欄の日本語科目の単位を修得した時は、下記の第2欄の単位に代えることができるとの記述がある（注6）。

第1欄	第2欄
日本語科目8単位まで (日本語I及びIIを除く。)	外国語科目のうち一の外国語の単位
日本事情に関する科目8単位まで	教養科目のうち8単位まで

2.4. 1993年度（後期）の実践報告

2.4.1. 日本語Ⅱ（初級）

《受講生について》

受講生数は合計4名である。国籍別の人数は以下の通りである。

タ	イ	2 (名)
中	国	1
エ	ク	1
ア	ド	ル

本留学生は全員が英語によるコミュニケーションが可能であったので、必要な場合には、媒介語として英語を使用した。

受講生は皆熱心で、レベル的にもまとまりがあり、クラス運営が容易であった。受講生のうち、タイからの留学生1名とエクアドルからの留学生1名とは中級レベルの日本語Ⅳも受講していたが、レベル的には、日本語Ⅱの方が適していたようである。

《教材について》

主に使用した教材は以下の通りである。

- ①『Situational Functional Japanese Vol. 1 (Notes)』
筑波ランゲージグループ (1991) 凡人社
- ②『絵とタスクで学ぶにほんご』
村野良子・谷道まや (1988) 凡人社
- ③『24 Tasks for Basic Modern Japanese
— にほんごきいてはなして — Vol. 1.2』
元橋富士子他 (1989) The Japan Times
- ④『初級日本語ドリルとしてのゲーム教材50』
栗山昌子・市丸恭子 (1992) アルク
- ⑤『はじめての漢字300』
太田淑子他 (1992) くろしお出版

この他、絵カードや写真を適宜教材として使用し、日本語の動詞や形容詞といった品詞別に語彙を増やしたり、文を作る作業を行ったりした。

《授業の概要》

前期の日本語Ⅰに続く日本語Ⅱは、初級後半のレベル(注7)である。日本語Ⅱの目標は、日常生活に役立つ日本語を習得することとした。まず、基本的な文法項目を定着させるため、練習や宿題、小テストを重ねて行った。

また、「自己紹介」、「郵便局で」、「場所を聞く」といった場面シラバスにより、「話す・聴く・読む・書く」の4技能のうち、「話す・聴く」に比重をおいたコミュニケーション能力の養成を図った。さらに、ひらがな、かたかなの復習に加え、若干の基礎的な漢字の学習を行った。

《日本語Ⅱにおける問題》

本授業における問題は、授業時間の不足にある。現在、日本語Ⅱは、1週間当たり3時間(90分×2コマ)しか開講されていない。初級レベルの留学生は、毎日コンスタントに授業で学習することにより、日本語能力を飛躍的に向上させることが可能である。今後、日本語教官の数を増やし、授業時間数と内容を充実させることが望ましい。ただし、将来、大学が留学生受け入れの際、ある一定レベル以上の日本語能力を要求するようになれば、現在あるような初級クラスの受講生が減少するものと考えられる。

2.4.2. 日本語Ⅳ(中級)

《受講生について》

14名の留学生が日本語Ⅴを受講した。国籍別の人数は以下の通りである。

中 国	6 (名)
フィリピン	2
フランス	2
タイ	1
エクアドル	1
インドネシア	1
オーストラリア	1

《教材について》

日本語Ⅳの目標は、中級レベルにおける「話す・聴く・読む・書く」の4技能を総合的に養成することとした。日本語受講生のニーズ分析の結果、授業に対する希望の多くは、「4技能全ての日本語能力を伸ばしたい」、「文法

の復習をしたい」、「敬語の勉強をしたい」、「テレビや新聞の日本語が理解できるようにになりたい」等であった。そこで、このクラスでは、毎回予め決めであるテーマについての4技能統合型の教材を使用し、小テストで文法の定着を図った。教材については、可能な限り生教材 (authentic materials) を用いるようにした。文字が小さくて特に漢字の読みづらいものは、拡大コピーをして配布した。以下に、具体的な教材のテーマを示す。

1. 環境問題

- ①ゴミ処理
- ②自動販売機
- ③車と生活

2. 家族と社会

- ①単身赴任と家族
- ②労働と余暇
- ③女性と社会通念

3. 教育問題

- ①受験と塾通い
- ②大学生と卒業旅行

4. 農業問題

- ①食生活 (米をはじめとする食料の輸入の問題)
- ②農業人口の減少

以上のテーマは、受講生からの希望により、現代における日本の問題を扱ったものである。内容は、留学生の身近な問題から、地域社会や国の問題、国際問題へと発展させるように留意した。また、現代日本の問題を扱う時には、日本と各留学生の母国の場合との比較のみならず、留学生の母国間での比較等も行った。

使用教材は、『朝日新聞』、『広報たかまつ』、エッセイ、広告等の生教材の他、主に以下の市販教材を併せて使用した。

- ①『「読み」への挑戦』
伊藤博子他(1992) くろしお出版
- ②『続・「読み」への挑戦』
伊藤博子他(1992) くろしお出版
- ③『朝日新聞で日本を読む』
伊藤博子他(1990) くろしお出版
- ④『実践力のつく日本語学習－インタビュー編－』
谷口聡人他(1992) アルク
- ⑤『実践力のつく日本語学習－アンケート編－』
谷口聡人他(1993) アルク
- ⑥『日本語中級読解』
富岡純子・高岡サク(1992) アルク
- ⑦『Formal Expressions for Japanese Interaction 待遇表現』
アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター編(1991)
The Japan Times

《授業の概要》

よく使用した学習活動方法は、以下の通りである。

- ①テーマについて知っていることを話し合う
テーマによっては、日本人にインタビューやアンケートをとる
- ②読解の教材として、そのテーマに関する資料を読む
- ③聴解の教材として、そのテーマに関するテープを聴く
- ④テーマについてロールプレイやディスカッション、ディベート等を行う
- ⑤話し合ったこと等をもとに作文を行う
- ⑥漢字や語彙・表現、文法の小テストを行う

また、下半期の授業のうち、1コマ(1コマは90分)ずつ7回にわたって、受講生のグループごとの発表と質疑応答の形式を採った。これは、大学や大

学院のゼミの予備練習のつもりで行った。方法は以下の通りである。

- ①受講生たちが、興味あるテーマを選択し、それに関する新聞記事等の資料の読解を自宅で行ってくる。必要に応じて、自分で他の資料を準備する。
- ②授業でその資料を読み、他の受講生からの内容や漢字の読み方に関する質問を受け付け、教師役になって説明をする。
- ③司会役になって、クラス全体でのディスカッションを進める。

新聞記事などの資料は、教官が準備した。場合によっては、予め漢字のふりがなを付けておいた。これは、中国人留学生が比較的漢字の読みができるのに対して、非漢字圏の留学生は、漢字の読み方と意味を調べるだけで、膨大な時間を費やさねばならず、十分な読解のための時間がとれなくなることが多いからである。

試験は、学期の最後に、日本語の4技能全てにわたって、筆記試験、聴解試験、口頭試験という形式で実施した。

《日本語Ⅳにおける問題》

日本語Ⅳにおける主要な問題は、中級レベルの日本語教育の問題と重なる。つまり、初級レベルを終了した学習者がどのようにして、より高次のレベル（より複雑な談話・文章レベル）に移行できるかという問題である。本授業においては、一つの試みとして、受講生に、談話や文章中の接続表現に注意するよう指導した。例えば、読解の際に、接続詞に続く文章の内容を推測させたり、また、まとまった発話を行う際に、適切な接続表現を使用するよう注意を促したりした。また、中級レベルから、日本語の理解能力と使用能力の差が大きくなってくる。実際には個人差もあるが、「読む」技能と「聴く」技能はある程度上達する一方、「話す」技能と「書く」技能は同程度までには上達しにくいようである。本授業では、できるだけ4技能を網羅した学習活動を行ったが、受講生の日本語の習得過程については依然として不明な点

が多い。こういった問題は、現在日本語教育の研究者によって研究が進められている。さらに、日本語IVでは、学習者の母語がさまざまであったり、漢字圏と非漢字圏の学習者が一緒に学んでいるのも特徴である。しかし、そういった学習環境における方が、学習者同士のインターアクションは多くなっているようである。というのは、例えば、学習者の母語が共通である場合、しばしば、学習者同士が母語でコミュニケーションを行いがちだからである。最近、中国人留学生の増加に伴い、留学生や指導教官の先生方から、休憩時間や留学生寮において中国人同士の中国語によるコミュニケーションが増えていると聞く。筆者らは、日本で生活している留学生に、できるだけ日本という環境を生かして、日本語習得を進めてもらいたいと思っている。したがって、筆者らは、日本語による文化交流を行う意味においても、日本語の「多国籍クラス」の特徴を生かし、授業における日本語使用の方法を考えることが必要だろうと考えている。

最後に、日本語の授業と受講生の専門分野との関係について述べる。留学生数増加とともに、留学生の専門分野も多岐にわたるようになってきた。そのため、日本語の授業において、特定の専門分野の日本語を扱うことはできないが、将来彼らが専門分野での日本語によるコミュニケーションがスムーズに行えるよう、いくらかの準備を行うことは可能だと考える。具体的には、ゼミ形式での発表や質疑応答、レポートの書き方の基礎となるような練習を日本語の授業で行うことである。そのためには、話しことばでは場面に応じた待遇表現の習得が不可欠であり、現在の授業でも実施している。また、書きことばでは段落やまとまった文章を書く練習を少しずつ行う必要があり、現在の授業でも取り組み始めている。

以上、中級レベルの日本語IVの実践報告を行った。中級レベルというのは、実に広い範囲をさすものである。さらに中級レベルでは、学習者の専門や目的が異なる場合が多いため、毎年、今回の報告と同様の状況が見られるわけではないが、今後も学習者のニーズにできるだけ合致した日本語教育を行いたいと考えている。

2.4.3. 日本語VI（上級）

《受講生について》

受講生数は合計10名である。国籍別の人数は以下のようである。

中 国	7 (名)
オーストラリア	1
フィリピン	2

受講生は日本語中級・日本事情のクラスにもあわせて出席しているものが大部分であった。したがって、上級とは言いながら、実質的には中級レベルとそれほど変わらない授業となってしまった。

受講生のレベルはかなりばらついていた。

《教材について》

以下の2冊を主要な教材として授業を行った。

①『日本語を楽しく読む本・中級』

産能短期大学日本語教育研究室編（1992）第2版
産能短大国際交流センター

②『日本語を楽しく読む本・中上級』

小出慶一（1993） 産能短大国際交流センター

①は前期と後期の一部に、②は①を終えた後、後期の一部に使用した。

上の教科書では不十分な、文法・作文・聴解の面については、適宜市販の教材や生教材で補った。使用した主な市販の教材は以下のようである。ただし、いずれも一部分を使用しただけである。

③『日本語文法セルフマスターシリーズ3 格助詞』

益岡隆志・田窪行則（1987） くろしお出版

④『日本語作文Ⅱ』

C & P 日本語教育・教材研究会編 (1993) 第9版 専門教育出版

⑤『インタビューで学ぶ日本語』

堀 歌子他 (1991) 凡人社

⑥『講義を聞く技術』

産能短期大学日本語教育研究室編 (1988) 産能大学出版部

③は文法, ④は作文, ⑤⑥は聴解の教材である。

《授業の概要》

上記のそれぞれの教材の内容と関わらせながら, 授業の概要について述べる。

[教材のレベル]

①は, 次のような人々を対象に作られた教科書である:

- a) 日本の大学や大学院などへ進学を希望している人。日本語で少し専門的なものを読む準備を始めたいと思っている人。
- b) 中級から上級への橋渡しとして, 読む力をつけたいと考えている人。

受講生のほとんども, このいずれかにあてはまり, レベルの面でも適当であったと考えられる。

②は, ①を終えた段階の人たちを対象にしたものであるが, 文章もかなり長くなり, 漢字も多い。そのため, 非漢字圏の学生にとって, ①はほぼ「楽しく読」めても, ②は難解に過ぎた人が多かったようである。そのため, とくに後半, ②ばかりではなく, 他の教材を比較的多く使うようになっていった。特に, ④を使って, 作文にかなりの時間を割いた。

③-⑥は, レベルとしては, ②とほぼ同様な, やや難しい, といったところである。

[教材の内容]

①で教材として取り上げられている文章は, 次の三つのタイプに分けられ

る。

- a) 昔話笑い話などストーリー性があるもの、
- b) 体験談や新聞のコラムなど、ある個人の経験などをもとに書かれたもの、
- c) やや学術的なもの、論理的に客観的に説明しようとするもの。

レベルとしては、a) がやさしく、b) c) と進むにつれて難しくなる。

②では、c) の割合が増加する。

④は、身近なトピックによる表現練習をめざしたもので、初級・中級で既習の文型や言い回しにも配慮している。

⑤は、初級などでは、概して“丁寧な発音”を聴いてきた学生が、生の日本語を聴くための練習である。色々な人が登場するインタビューを含んでおり、登場人物の属性や場面による、日本語のバリエーションを体験できる。

⑥は、大学の講義を聴く準備のための教材である。研究生の多くは、将来、正規の大学院生・学部学生となることを目指しているから、講義を聴く技術を身につけることは、何よりも重要である。

種々の教材を使用することで、「読む」にやや重点をおきながらも、「話す・書く・聞く」の面についても十分に扱えたかと考えている。

[授業の目標]

①②では以下のように目標が設定されている。

1. 「読む」ということは、人が自分自身の知識や想像力を積極的に使って、テキストに書かれている内容についてのイメージを作ることだ、という。一つ一つの文字や言葉を理解することよりは、読む人が、「読めた」「ああそうか」という全体的なイメージを持つことの方が大切である。
2. 読み方は、テキストの性質、読む目的、さらには時間の余裕など、さまざまな条件によって変わってくる。そのような実際的な読みの体験を

通して、読み方を身につけることが重要である。

3. 学習者自身の読みの活動（イメージ作り，モニター）を大切にする。
そのため、学習者が自分自身のイメージを作り上げられるようなタスクを多く採り入れ、また、自分の読みの状態のモニターを促すために、チェックの指示を一つ一つの作業ごとに付ける。
4. 学習者間の相互作用を重視する。

このような特色を持ったテキストに対して、受講生の一人は、「自分一人で文章を読んでもなかなか内容がわからないが、このテキストだと非常に読みやすい」と語った。

⑥も、読解と聴解という違いこそあれ、ほぼ同様の目標設定がなされている。

逆に、このタイプの教材は、その長所が同時に短所にもつながる、それは、「一つ一つの文字や言葉を理解すること」や文法面がおろそかになるということである。そこで、それらの点については、上記③④などの教材で補うようにした。

[成績評価]

受講生の中に、単位を必要とする者がなかったために、制度上は、成績評価をする必要はなかったのであるが、学期末に、既習の教材を使用して試験問題を作成し、試験を実施した。

《日本語VIにおける問題》

一部の受講生がコンスタントに出席をせず、出たり出なかったり、を繰り返したので、毎回宿題や小テストを課することをせず、各時間内に授業をできるだけ完結させるようにした。この方法のおかげで、たまに出てきてもわからなくて困る、ということはなかったようである。しかし、毎時間の授業の積み重ねがないため、学習者の日本語能力の伸長という点では、やや物足りなさが残った。

また、当該年度は、受講留学生の日本語のレベルにあわせて授業を行ったために、上級とは言いながら、あまり高度な内容を盛り込むことができなかった。もっとも、今後、留学生数の増加につれて、本当の意味の上級レベルの学生も増えてくるであろうから、この問題はやがて解消するであろう。（実際、1994年度には、そういう学生が増加してきている）

2.4.4. 日本事情Ⅱ

《受講生について》

受講生数は合計12名である。国籍別の人数は以下のようである。

中 国	9 (名)
フ ラ ンス	2
オーストラリア	1

受講生の多くは、日本語Ⅱ・日本語Ⅳ・日本語Ⅵのクラスにも出席していた。これは、多くの研究生が自分の日本語能力に関係なくできるだけ多くの授業を受講しようとしたためである。

《教材について》

以下の教材を使用した。

(主教材)

- ①『中級から学ぶテーマ別日本語』
荒井礼子他(1991) 研究社
- ②『現代日本語コース中級Ⅰ・Ⅱ』
名古屋大学言語文化部日本語学科編(1994)第8版
名古屋大学出版会
- ③『ようこそ四国へ』
武本明子・Steve McClarty(1993) 美巧社
- ④『天声人語 [’91・秋]』
朝日新聞論説委員室(1992) 原書房

- ⑤『外国人にもはなせる今どきの若者は…』

箭本隆志 (1992) アイベックプレス

- ⑥『外国人にもはなせる日本の伝統・文化』

箭本隆志 (1992) アイベックプレス

- ⑦『外国人にもはなせる日本のビジネス事情』

箭本隆志 (1992) アイベックプレス

- ⑧『外国人にもはなせる日本の家庭・生活』

箭本隆志 (1992) アイベックプレス

- ⑨『外国人にもはなせるトレンド最前線』

箭本隆志 (1992) アイベックプレス

(副教材)

- ⑩『日本語運用能力養成問題集初中級用 1, 2』

寺村秀夫 (1989) 凡人社

- ⑪『日本語文法問題集初中級用Ⅱ』

山岡千弘・山谷陽子 (1990) 凡人社

- ⑫『日本語中級Ⅰ練習帳』

国際交流基金日本語国際センター (1990) 凡人社

- ⑬『日本語上級文法教本Ⅰ』

寺村秀夫・白川博之 (1988) 三友社

- ⑭『AN INTRODUCTION TO THE STRUCTURE OF JAPANESE
WORKBOOK 2, 3, 4』

寺村秀夫 (1981) 三友社

- ⑮『日本人のライフスタイル』

財団法人NHKインターナショナル (1994) ビデオ 8巻
国際交流基金

- ⑯『日本語テスト問題集』

日本語能力試験研究会 (1992) 第2版 凡人社

①～⑨の教材は前期の日本事情Ⅰに引き続き、テキストとして使用した。①の教材には市販の聴解教材とワークブックがあるので、併せて使用した。⑩～⑯は、文法の復習や、作文能力と聴解能力の養成のために、必要に応じて一部使用した。また、これらのテキストは、授業以外の個別指導時や学生の目的やレベル別の宿題にも使用した。

《授業の概要》

授業では、日本の歴史および文化、日本の政治、経済、日本の自然、日本の科学技術等や、言語の文化的背景を学習した。まず、教材の中の語彙・文型・文法に関する説明の後、理解の手助けとなるビデオ教材、活字、絵、地図等の教材を用い、さらに本時の教材の内容の理解ができていないか否かを小テストによりチェックを行った。次に、学生の経験や自国の事柄について述べさせ、最後に意見交換や情報交換をしたり、文献を調べさせたりして日本事情に関する理解を深めさせた。したがって、事柄に関する知識の習得に終わるのではなく、留学生が日本人学生とも日本事情の教材を通して意見交換を行う（注8）ことにより、日本文化や世界の異文化を理解するための能力を養うことができたと考えている。

初級レベルの学生には、①のテープ教材を使って予習と復習をさせた。授業では、最初に筆者の声で①を録音したものを聴かせ、慣れたところで市販テープを聞かせた。これは、初級レベルの受講生には、ナチュラルスピードの市販のテープを聴き取るのが難しいためである。筆者の日本語教育の経験によると、テープの内容を聴き取る訓練をした学生の方が「外国人日本語能力試験」の1級の聴解試験の合格率が高かった。この聴解試験は、アナウンサーの声で朗読された内容について質問がされるので、本授業ではアナウンサーの朗読を聴き取る練習もした。

《日本事情Ⅱにおける問題》

受講生の日本語能力にかなりばらつきがあったので、レベルに合わせて宿題を与えたり、個別指導を行ったりした。しかし、宿題も放課後の指導も強

制をしなかったで、やってくる者とそうでない者とでさらなる日本語能力の差を生んでしまったようである。本授業における問題は、受講生のレベルのばらつきに対していかに対処するか、また受講生の多様なニーズや目的にどう応えていくかということである。

3. 香川大学における日本語教育の課題

3.1. 留学生の受け入れについて

現在日本が行っている海外援助資金は、1兆円を超え世界第1位となっている。しかし、外国からは、あまり高い評価を受けていないのが現状である。それには幾つかの理由が考えられるが、一つには目先の援助のためのみに資金が浪費され、各国の人々が真に求めているものへの援助が少なかったためではないだろうか。息の長い援助としては、留学生の受け入れがある。留学生の受け入れが推進されれば、日本で学んだ留学生が、やがて帰国し母国を支える原動力となり、長期的には日本の理解者も多くなるであろう。ゼミやサークル、そして学友や地域の人々との交流は、二国間レベルの交流のみに終わらず、世界的な交流の基となる。これが継続されれば、やがて世界のネットワークへと発展していくことが可能である。本学でも留学生が増え、世界ネットワークの夜明けを迎えようとしている。しかし、留学生が増えるに伴い、これまでと同じようなサービス（留学生一人一人に適した学習指導。また、学習指導と併せて、進路や生活のアドバイス等）が十分にできなくなっていくという心配がある。留学生数が少なかった時には、全く日本語ができないという学生でも研究生として受け入れることが可能であった。なかには、来日当時、日本語能力が低かった研究生でも8カ月（来日前に母国で3カ月）程度で「日本語能力試験」の1級に合格した例があった。その学生の場合、本人の高い意欲と指導教官の理解、そして日本語の教官との密なる連絡が行えたこと、および日本語の個別指導等が可能であったこと等の要因が重なったために、日本語能力の著しい向上が認められたと考えられる。しかし、今後留学生数の増加に伴い、現状の留学生受け入れシステムと指導体制では、従来可能であったサービスが難しくなるであろう。従来可能であったサービスを低下させないためには、全学的に考慮すべ

き2つの問題が考えられる。

第1は、留学生数の増加に伴う適正な教官数の確保である。

第2は、留学生の入学試験の基準についての全学的共通理解を得る必要があるということである。

次に、留学生の受け入れにさいしての問題点を院生、学部生、研究生、特別聴講学生、科目等履修生ごとに示す。

3.1.1. 大学院生の問題点

日本語能力または英語能力のない留学生の入学を許可したため、入学後に、担当教官や他の教官がスムーズに指導できないという問題が、指導教官から指摘されている。

留学生が、日本人学生や世界各国の学生たちと交流を進め、世界の文化をお互いに認め合い、そしてともに学ぶ教育を推進するためには、効率的に学習成果を上げる必要がある。そのためには入学試験にさいして一定の基準を設ける必要がある。日本語能力については学部生と同じく「日本語能力試験（1級）」に準拠し、さらに日本語で論文が書ける能力、コースによっては英語で論文が書ける能力を有していることを必要条件とするべきである。

3.1.2. 学部生の問題点

従来、入学時に厳しく日本語能力を問わなかったため、学部生が入学後にレポートが書けないという日本語能力に関する指摘が、本学のみならず、他の国立大学においてもあったようである。折しも文部省から、平成6年5月17日付け文高大第178号の「平成7年度大学入学選抜実施要項について」の6において、「日本語能力試験（1級）」の積極的活用法についてより一層の配慮をすることが望ましいと通知されてきた。大学教育を効率よく受けるためにも、「日本語能力試験（1級）」に準拠した能力を要求することが、今後不可欠になるであろう。

3.1.3. 研究生・特別聴講学生・科目等履修生の問題点

従来、研究生は、在籍1年で希望の大学院に進学できなかった場合でも、本学の日本語のコースで2年目の学習も可能であった。しかし、留学希望者数が増加すれば、2年目の学習が不可能になる恐れがある。仮に留学期間が1年間と限られたとすれば、研究生か特別聴講学生として入学するには、「日本語能力試験（3級）」に準拠した能力を有すること等（例えば入学前に国立大学の留学生センターや日本語学校で6カ月以上の日本語教育の集中授業を受けてそのレベルに達していること）が必要な条件となると考えられる。

現在「日本語能力試験」は、1年に1度、12月にしか行われていない。世界各国の学校の学期制を考えると、1年に1度では留学希望者のニーズに応えられていないのではないかと考えられる。全学的理解が得られるならば、「日本語能力試験」とは半年程度間隔をおき、本学の言語学・日本語教育教室が、「日本語能力試験」に準拠した試験を実施することも可能であろう。

3.2. 留学生と日本人学生との交流について

留学生は、香川大学入学後、ある一定期間チューター制度を利用している。日本人チューターが中心となって、留学生と日本人学生との交流の輪が広がればよいのであるが、実際には、留学生から「日本人の友人ができない」という悩みをよく耳にする。その理由を聞いてみると、留学生が話しかけても日本人学生はあまり日本語でコミュニケーションしてくれない（留学生の母語や英語を使うことも）、以前に話したり外国語を教えてあげたりした相手でも、次にキャンパスで会った時には、あまり話をしてくれない等、日本人学生の方にも責任がありそうである。現在、筆者らは、まず日本語教員養成コースの学生に（教育実習の際には必ず）日本語科目に参加するように呼びかけている。その結果、授業の場で、実際に留学生との意見交換が積極的に行われるようになり、大変好評である。また、現在では日本語教員養成コースの学生が中心となって、留学生と昼食を共にしたり、ボランティアで日本語を教えたりする交流が始まっている。さらに、少しずつではあるが、最近、留学生との交流を目的とした同好会的組織が活動を始めようとしている。いずれ、会員を増やし、サークル活

動として認められれば、全学の留学生と日本人学生との有意義な交流が定期的に行われるだろう。また、留学生との交流に興味がある学生は日本語教員養成コースの学生以外にも大勢いるという。今後、サークル活動とは別の場面においても、例えば教養科目や専門科目等の授業の場において、日本人学生が留学生とコミュニケーションを図ることを願っている。

4. おわりに ー今後の香川大学における留学生教育を充実させるためにー

最近、日本の大学において、留学生が日本人学生と共に受講することが日常化しつつある。筆者らは、今後、大学における留学生の増加が、日本人学生と日本人教官に対して、さまざまな意識の変革を迫ることになると確信している。これは、決して「留学生の要求を何でも受け入れよ」とか「留学生を特別扱いせよ」と主張するものではない。教官は、留学生にも日本人学生と同様の対応が必要である。ただし、彼らは、それぞれの異文化を背景に持った人達である。当然、大学入学以前に受けてきた教育は、留学生によって千差万別である。そのことを誰もが十分に理解しておかなければならない。そこで、留学生が、日本の大学教育において、新しい息吹を吹き込んでくれることを期待したい。例えば、彼らの多くは、日本語科目の授業において次のようなことを実践している。他人の意見を注意深く聞き、問題点を整理して、自分の意見を明確に主張すること、また、できるだけ、留学生相互において文化的背景を知り合い、その存在を尊重しようとしていること等である。そのことが、教育実習等で日本語科目に在籍している日本人学生に、良い刺激を与えている。

本稿では、1993年度の実践報告を中心に、香川大学における日本語教育の現状と課題について考察した。日本語教育は、全学の留学生教育の一端に過ぎない。今後、日本における留学生事情を注視しながら、香川大学における留学生教育について多くの方々と有意義な意見交換ができれば幸いである。

《注》

- (注1) 香川大学学生部の資料によると、香川大学の受け入れ留学生の総数は、1987年度には36名であったが、1990年度には55名となり、1994年2月1日現在では、66名に増加している。
- (注2) 1993年度前期については、日本語科目を受講する留学生の数が一定しなかった。これは、学期の途中で(5月以降)来日した留学生が授業に加わったり、学期の途中で帰国する等の理由により受講をやめた留学生がいたことによる。そのため、受講する留学生のニーズがしばしば変化し、頻繁にシラバスやカリキュラムの変更を迫られた。そこで、本稿では、一定期間の実践の報告として、受講する留学生数が比較的安定した1993年度後期の場合を取り上げようと考えた。
- (注3) 「特別聴講学生」については、『香川大学学則』第12章64条に次のように規定されている。
- 他の大学又は短期大学(外国の大学又は短期大学を含む。)の学生で本学の授業科目を履修しようとする者があるときは、当該大学との協議に基づき、特別聴講学生として履修を許可することがある。
- 1993年2月1日現在、特別聴講学生の中で、フランスのTours高等商業大学の学生2名(経済学部)、オーストラリアのFlinders大学の学生1名(教育学部)の計3名が日本語科目を受講している。
- (注4) 「日本語能力試験」とは、「日本語の熟達度テストとして」「国際交流基金と日本国際教育協会の共催で」「1984年から開始された」年1回の試験である。(田中(1988) p.72) 以下に、日本語能力試験の構成及び認定基準を示す。(松本隆他(1991) 『日本語能力試験1級受験問題集』アルク(p.119))
- (注5) ただし、受験直前の時期になると、受験勉強のため、日本語の授業を休むことが多くなる。1993年度の場合も1月から2月にかけて、研究生のうち半数が授業を休んでいた。また若干の留学生は、授業には出席せず、日本語教官のところへ個別に日本語に関する質問に来ていた。農学部の留学生の場合は、実験が忙しいために授業を休むということがあった。
- (注6) 1994年度に香川大学学則の一部が変更されることになった。本稿執筆時には、変更部分がまだ印刷されていなかったため、『香川大学報』に依った。
- (注7) 初級レベルでは、日本語のあいさつや基本的な文型、及びひらがな・かたかなを習得し、200~300程度の基本的な漢字を習得する。また、学習者の発話は文レベルであって、長い文章を書いたりまとまった発話をしたりすることがまだできない段階である。
- (注8) 日本人学生との交流については、次章3.2.において論じる。

日本語能力試験の構成および認定基準

級	構 成			認 定 基 準
	類 別	時 間	配 点	
1	文字・語彙	45分	100点	高度の文法・漢字(2,000字程度)・語彙(10,000語程度)を習得し、社会生活をする上で必要であるとともに、大学における学習・研究の基礎としても役立つような、総合的な日本語能力。(日本語を900時間程度学習したレベル)
	聴 解	45分	100点	
	読解・文法	90分	200点	
	計	180分	400点	
2	文字・語彙	35分	100点	やや高度の文法・漢字(1,000字程度)・語彙(6,000語程度)を習得し、一般的なことがらについて、会話ができ、読み書きできる能力。(日本語を600時間程度学習し、中級日本語コースを修了したレベル)
	聴 解	35分	100点	
	読解・文法	70分	200点	
	計	140分	400点	
3	文字・語彙	35分	100点	基本的な文法・漢字(300字程度)・語彙(1,500語程度)を習得し、日常生活に役立つ会話ができ、簡単な文章が読み書きできる能力。(日本語を300時間程度学習し、初級日本語コースを修了したレベル)
	聴 解	35分	100点	
	読解・文法	70分	200点	
	計	140分	400点	
4	文字・語彙	25分	100点	初歩的な文法・漢字(100字程度)・語彙(800語程度)を習得し、簡単な会話ができ、平易な文、又は短い文章が読み書きできる能力。(日本語を150時間程度学習し、初級日本語コース前半を修了したレベル)
	聴 解	25分	100点	
	読解・文法	50分	200点	
	計	100分	400点	

◇本稿における章ごとの執筆者は以下の通りである。

村岡……「1」, 「2. 1」, 「3. 2」, 「4」

山下……「2. 3」, 「3. 1」

中井……「2. 2」

さらに、1993年後期の実践報告については、村岡が「2. 4. 1.」(日本語Ⅱ)及び「2. 4. 2.」(日本語Ⅳ)を、中井が「2. 4. 3.」(日本語Ⅵ)を、山下が「2. 4. 4.」(日本事情Ⅱ)を担当した。なお、内容は全て3人の協議によるものである。

《参考文献》

田中望(1988)『日本語教育の方法—コース・デザインの実際—』大修館書店

田中望・斎藤里美(1993)『日本語教育の理論と実際—学習支援システムの開発—』

大修館書店

日本語教育学会編(1991)『日本語教育機関におけるコース・デザイン』凡人社